福島っ子サマーキャンプ

生きるチカラ
～23 日間のあゆみ～

期間：2011 年 8 月 1 日～23 日

aichikara

もくじ

福島っ子サマーキャンプ

プロローグ ……P.1

『愛チカラ』とは

子どもたちの笑顔　～そのために私たちができること～

僕たち私たちはなぜ“ココ”に来たのか？

僕たち私たちの生活　～23日間の歩み～　～タイムスケジュール～

エピソード ……P.6

はじまり

心の葛藤

自然の中で

思わず出た子どもの本音

掃除道具破損事件

心と心のぶつかり合い

つながった心と心

子どもたちの咲顔、家族の希望 ……P.13

むすびに ……P.14

福島っ子サマーキャンプ Returns

はじめに ……P.1

エピソード ……P.2

終われない旅のはじまり

子どもたちの SOS

遠ざかる、ふるさとの味

それでも、遊びたい！

共に“むすぶ”絆

ココロの線量計

むすびに ……P.8

戻れない　３．１１

唯一自分たちを守れる方法は

『決然と朗らかに生きる』

もしくは、

『それができないなら去る』

『愛チカラ』とは

日本の未来を担う、“学生”が主役の活動です―

当団体愛チカラは、3月11日に起きた東日本大震災をきっかけとし、愛知県内の学生と社会人が集まり、**復興支援**を自発的に行う団体として設立致しました。主に、**学生**が主役となって活動し、それを後方から社会人がサポートするといったスタイルが当団体の特色であり、立場や世代を越えたメンバーが支え合い、自己の成長につなげ、**一日も早い復興**を目指し日々活動を行っています。

子どもたちの笑顔　～ そのために私たちができること ～

今回の「福島っ子サマーキャンプ」は福島県伊達市の子どもたちに子どもらしい心からの笑顔を取り戻してもらい、ひと夏の思い出にとどまらない心の繋がりを愛知で作って欲しい、私たち一人ひとりと新しい“家族”になって欲しいという思いからはじまりました。

この報告書は「僕たち私たちがなぜ“ココ”に来たのか？」からスタートし、「つながった心と心」での子どもたちの感情の爆発を、大粒の涙と新たな出発を表現するまでに至った“記録”と“記憶”です。その過程で生まれた立場や世代をこえたいくつもの心の交流は、何にも代え難い大切な時間ばかりでした。

僕たち私たちはなぜ“ココ”に来たのか？

３月１１日に起きたあの大きな地震をきっかけに、子どもたちの日常生活から自由な時間が減っていきました。外に出て思いっきり走ったり、水遊びをして日焼けをしたり、家族旅行を楽しんだりといった機会を奪われたことによって、子どもたちは自然とのふれあい、人とのふれあいを通して育まれる“感性”や“感情”の成長過程を奪われてしまったのです。

制限された日々の生活の中で、本来現れるはずの子どもらしい様々な心の表情は押さえ込まれてしまいました。それと同時に、子どもたちは何か“大切なモノ”まで一緒に押しやってしまったのではないでしょうか。

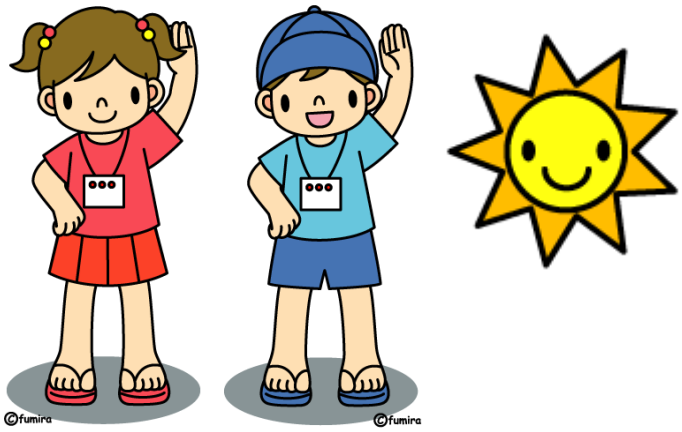
今回の企画は、子どもたちがこれまで押さえ込んできた好奇心を解き放ち、心と体の感性を全開にして思いっきり遊んで“笑顔”になってもらうこと。そして、心の奥底に押しやった“大切なモノ”を子どもたち自身の手で掘り起こしてもらうことを目的に行われました。

このキャンプを通して、子どもたちの心が変化を遂げたことは、子どもたち自身の表情の変化がすべてを物語っていました。出し切れていない笑顔から、出し切っている笑顔への変化です。その変化の過程は最前線で見守ってきたボランティアスタッフの心に、感動とともに強く深く刻まれ、子どもたちにとっては、生きる喜びと明日への“希望”を感じ取った瞬間であったように思います。

希望を携えてイマを生きる子どもたちの姿は、社会全体を勇気づけてくれる“宝”です。

僕たち私たちの生活　～ 23 日間の歩み ～

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
	6:30 福島県出発	9:00 歓迎式	13:00 焼き物体験	10:00 工作教室	10:00 座禅	9:00 遊園地
	17:30 密蔵院到着	15:00 科学実験			13:00 ﾎﾟﾝ菓子 おじさん登場	
	19:00 ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝ					
7	8	9	10	11	12	13
10:00 おそうじ	6:15 B ﾁｰﾑ 福島県出発	11:00: 開会式	9:30 ぶどう狩り	11:00 旧小原村到着	10:00 紙すき体験	10:00 名古屋競輪
13:00 スイカ割り大会	16:00 B ﾁｰﾑ 密蔵院着	12:00 プチ交流会		12:00 五平餅焼き	12:00 BBQ 大会	17:00 寿司屋喜多八
16:00 ラジオ出演	16:30 A ﾁｰﾑ 密蔵院出発	13:00 学校見学		13:00 カヌー体験	14:00 サッカー対決	
20:00 花火大会	17:30 A ﾁｰﾑ 至学館到着				14:00 染め物体験	
14	15	16	17	18	19	20
10:00 ﾚｽﾘﾝｸﾞ教室	B ﾁｰﾑ至学館 5 泊 6 日	14:00 ﾍｱｰｶｯﾄ	11:30 流しそうめん	13:30 有松絞り	11:00 パン教室	9:00 名古屋分散
19:00 ｽｰﾊﾟｰ銭湯	9:00 ｽﾎﾟｰﾂ大会	14:00 ｼﾞｬﾝﾍﾞ体験	15:00 プール	20:00 映画鑑賞会	16:00 プール	ﾌﾟﾗﾈﾀﾘｳﾑ 水族館
					18:00 野球観戦	18:00 花火大会
21	22	23				
10:00 恵那峡ｽｹｰﾄ	16:00 大交流会	7:00 A ﾁｰﾑ 至学館出発				
14:00 岐阜市 科学ｾﾝﾀｰ	19:00 フィナーレ	7:00 B ﾁｰﾑ 密蔵院出発				
		8:00 両ﾁｰﾑ 合流・出発				
		18:30 伊達市 役所前解散				



僕たち私たちの生活　～ タイムスケジュール ～

in 至学館大学

《♪イベントのない日♪》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	散歩・朝食		夏休みの課題		自由時間	昼食	自由時間					夕食	入浴・日記		自由時間	就寝

in　密蔵院

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
	起床・ラジオ体操	朝食	夏休みの課題		自由時間	昼食	自由時間			入浴		夕食・日記		自由時間		就寝

《♪イベントのある日♪》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	散歩・朝食		至学館大学・密蔵院出発	イベント参加								夕食	入浴・日記		自由時間	就寝

はじまり

８月１日、密蔵院に先発チームが到着しました。子どもたちは、バスでの長旅の疲れもあってか、歓迎ムードの中でも少し冷めている様子でした。

荷物を置いたあと、男の子たちは荷物からカードが入った袋や箱を取り出し、カードゲームに熱中し始めました。子どもたちからの話を聞くと、震災後は家の中での遊びが多くなり、カードゲームやテレビゲームで遊ぶことが多くなったということでした。

一方、女の子たちは雨が少し降っている様子を見て「この雨は安全なの？」また、珍しい形の花を見つけると「この花触っていいの？」ということをふともらしていました。

子どもたちには、今しか出来ない、今しか育むことができない多くのことがあるのだとしたら、今、何が奪われているのか？…その一つひとつを丁寧に理解し、根本からお互いに向き合っていく。それが、子どもたちとの“共生”の始まりでした。

心の葛藤

子どもたちは愛知に来た当初、カメラや記者に対してストレスを感じているように見えました。普通ではありえない注目を浴び、それがなぜか？ということも冷静に感じていながら、やはり、気分の良いものではない様子でした。そんな中でも、子どもたちは新しい環境で生きていく術を自分自身で探していました。さまざまな葛藤を抱えながらも、力強く乗り越えようとする姿を、子どもたちは見せてくれました。その証拠に、こちらでの生活に慣れて行くにつれ、周りの目を気にせずに、純粋にイベントを楽しむ姿が徐々に見え始めました。特に、ブドウ狩りを楽しんだ日の様子からは、子どもたちの変化を感じ取ることができました。子どもたちの方から「カメラ貸して！」とスタッフに対し積極的に声をかけるといった場面も多くあり、子どもたちとスタッフの距離感も少しずつ近づいていきました。

自然の中で

一泊二日の旧小原村での生活がやってきました。そこでは、川の中へ服のまま飛び込んで無邪気に遊ぶ姿が見られ、そのときの笑顔はこれまで見せたことのないキラキラ輝く笑顔で、スタッフたちが思わず驚いて感動し、涙するスタッフも居るほどでした。

これまで落ち着きを装っていたタイプの子どもも、たまらずその“笑顔の輪”に加わっていった様子も印象的でした。

その後のカヌー体験では、これでもかと大声で叫んで今まで我慢していた感情を自然の力によって目覚めさせられ、一気に噴き出したように見えました。

一日外で遊んだ子どもたちはみんな日焼けをし、お風呂の中で「ヒリヒリするよ～」「ねぇ見て見て！こんなに腕が焼けているよ！」と喜んでいました。

子どもたちはさすがに遊び疲れ、夜更かしの常連さんたちも珍しくいつもよりも早めの時間にぐっすり眠りにつきました。

一日を通して、子どもたちの心の扉が一気に開いた時間でした。

思わず出た子どもの本音

心を全開にした子どもたちは、スタッフに対する安心感から、甘えたい気持ち、かまって欲しい素直な願望を、態度に現すようになりました。これは子どもたちの“心の健康”にとっては大きな一歩です。

素直な表現ができるということは、本気のぶつかり合いが起こるということです。ここからスタッフと子ども、子どもと子どもの間での本気の心のせめぎ合いが生まれました。

スタッフはＡくんに、スーパーボールの使い方が危険だったので、強い口調で叱りました。すると、Ａくんの口から出てきた言葉は「ボランティアの人たちもテレビ局の人たちと同じで、どうせ僕らを見に来ただけだろ？」と言い、これに対して「違うよ。みんなとたくさん遊びたいと思っているんだよ。嫌なことや我慢していることは全部言って。」と伝えました。するとＡくんは、体の力がスッと抜けボロボロと泣きました。

翌日、昨日の大泣きが嘘のようにケロッとした表情で現れたＡくんは、今までの人との間に壁を作るような強い口調とはうって変わって、心を少し開いてくれたのか頼ってくるような口調に変化していきました。日を重ねるごとに心と心が近づいていくことが感じられた、大切な時間でした。

掃除道具破損事件

愛チカラが管理していた木製の「ほうき」でチャンバラをしていた子どもたちが、そのほうきを二本折ってしまったことがありました。詳しい状況を聞いたあと、子どもたち自身に責任を持ってガムテープを使って直してもらいました。その後、スタッフが子どもと一緒に代表の所へ報告に行きました。

事情を聞いた代表は、直したほうきを子どもたちの目の前で折って見せました。その瞬間、子どもたちの目がぐっと変化しました。

「さっき自分たちが直したものが目の前で壊されてどんな気分になった？」

「悲しい気持ちになった。」

「悲しいよね。でも、ほうきを壊されたことによって、君たちは私にも同じ思いをさせたんだよ。」

すべての物にはそれに携わった人の魂が宿っているということ、君たちはみんなのことを思う人たちの心までへし折ったのだということを伝えました。

その瞬間子どもたちの目から涙がこぼれ落ちました。

心と心のぶつかり合い

大学での生活も体験してもらおうと、密蔵院で生活していた子どもたちが至学館大学に来て4日が経ちました。プログラムを行う中で、子どもたちは通っている学校が違う事もあり、なかなか打ち解けられずに居ました。

予定よりも2日宿泊が延びる事になり、その事を告げた時、慣れない子との共同生活に限界が来たのか、2名が泣きだすという事態になりました。その理由を聞くと、違う学校の子に不満が多くあるとの事でした。

「2時間でもいいから密蔵院に戻りたい」と言い出す子も居ました。

子どものイマの気持ちを尊重してあげたいと言う思いはありましたが、根本的な解決にはならないので、子どもの成長を願い子どもたち同士で話し合いをするように言いました。

お互いに何が嫌なのかを正直に話し合い、これから何に気をつけて生活していくのが良いのかを、自分たちで考えてもらいました。

相手の意見に耳を傾け、自分の事を話したことによって、自分たちのとっていた行動を見直すきっかけとなりました。

この出来事がきっかけとなり、子どもたちの小さな会話や仕草に変化がでてきました。“違う学校の子”から、手をつなぎ笑いあう“友達”になりました。

これは、心と心のぶつかり合いが生んだ大きな成長でした。

つながった心と心

最終日、話和輪大交流会が開催されました。子どもたちにとっては最後のイベントでした。お祭りの雰囲気に、心躍る子どもたちの表情からは、笑顔が絶えません。

アーティストの演目や露店が会場を華やかに彩りました。手作りのバンブーコースターでは絶叫し、灯籠作りのコーナーでは和紙に思いを込め、メッセージを書き込む子どもの姿がありました。その中に「We are family」の文字を見つけました。これは私たちスタッフが着ているユニホームにも書かれているもので、すべての人たちと“家族”になるという思いで活動をしている、私たちにとってすごく感動的なことでした。

いよいよフィナーレを迎える時、一人ひとり名前を呼ばれた子どもたちが、スタッフのつくるアーチの中を元気よく駆け抜けていきました。そして、23日間を全力で駆け抜け、振り返りました。

子どもたちは、スタッフから「また会える日まで」の歌のプレゼントをもらいました。…もう言葉は必要ありませんでした。ワンワン泣き出す子ども、そんな子どもの様子を見たスタッフがもらい泣きをし、またそのスタッフと我が子を見た保護者の方々も涙を流し、会場中が一気に別れを惜しむ雰囲気へと変わっていきました。サマーキャンプがはじまった当初は、子どもたちがこんなに別れを惜しむ姿は想像ができませんでした。

私たちは、かけがえのない大切なものを得られました。

8 月 23 日 朝日新聞掲載

子どもたちの咲顔、家族の希望

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
サマーキャンプ隊長　横倉亜美
至学館大学 １年

このサマーキャンプを通して

私がもっとも忘れられないエピソードがあります。それは「そのお花触ってもいいの？」と口にした子どもがいたということです。それを他のスタッフから聞いたとき、何も考えられなくなりました。言葉にならない思いが、その場にいた多くのスタッフの心を引き裂きました。

放射線は、子どもたちの心からの笑顔を奪い、子どもらしく外で遊ぶことを奪っていきました。だからこそ、これから長期的な支援が必要で、今まで以上に震災と向かいあっていかなければならないと感じました。

これからの子どもたちの笑顔のために

サマーキャンプ最終日の、子どもたちと親御さんの涙を見たとき、福島っ子キッズキャンプを長期的に続けていく必要があると肌で感じました。

また、私がこのようにいろんな経験をさせてもらって、感じてきた多くのことを、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思います。そして、多くの人が東日本大震災を忘れず、一緒に頑張っていく大切さを感じてもらいたいと思います。

この企画を支えてくださったみなさんへ

サマーキャンプでは毎日何らかの事件が発生し、そのたびにどう解決していけばいいのか、みんなで知恵を絞る毎日でした。そんな私たちを成長させてくれ、支えてくれたのは、子どもたちの笑顔でした。

それでも、まだ未熟な私たちに、最後までよく接してくだった支援者のみなさんのおかげで、いろいろな壁を乗り越えることができました。

このキャンプは、全員が気持ちをひとつにして実施することができ、大きな感動を生むことができました。

私たちの“希望”を、心から支えてくださった多くのみなさん、本当にありがとうございました。

むすびに

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
学生代表　御堂大貴
愛知教育大学大学院 2 年

右も左も知らない私たちが、子どもを3週間も預かることが本当にできるのだろうか、という不安がかなりありました。そんな中で、サマーキャンプが始まり、やはり様々な試練が待っていました。忙しさのあまり眠れないということも多々ありました。つらく苦しい日々もありました。でも、そんな苦しさを吹き飛ばしてくれたのは子どもたちの笑顔でした。子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿を見るともっと楽しませてあげたいという気持ちが自然とわいてきました。そんな気持ちで 23 日間子どもたちと過ごすことができました。最後までやりきり、成功させることができたことは私たち一人ひとりの自信につながったと思います。これからの活動につながる大切な経験となりました。

サマーキャンプを通して、多くの「感謝」を感じました。最終日、福島の子どもたちの保護者の方々を大学にお招きし、懇談会を行いました。そこでは保護者の方々から多くの感謝の言葉をいただきました。「こんなに感謝したのは今までの人生で初めてです。」「感謝するという意味が分かった」といった言葉が聞かれました。こんなにも感謝されたのは、私自身も初めてであり、やってきて本当に良かったと心から思いました。愛チカラが人の役に立ち、それを実感できた最高の瞬間でした。

愛チカラに協力してくださった多くの方々にも、感謝の気持ちでいっぱいです。本当に多くの方々の協力により、サマーキャンプを成功させることができました。多くの方々の支えがなければこんなに素晴らしいキャンプをつくりあげることはできなかったと思います。多くの支えのもとで、自分も含め、学生たちは大きく成長することができました。最初は自分の意見も満足に言えなかったメンバーが最終日には自分から議題を提案できるようになりました。自分たちで考えて、自分たちのサマーキャンプを最高のものにしようと努力する姿がそこにはありました。短い睡眠時間の中、誰一人として文句一つ言わず笑顔で戦い続けた仲間たちを誇りに思います。本当に最高の仲間たちです。感謝の気持ちを大切に、このキャンプを通して学んだことを生かして、最高の仲間たちとこれからもみんなの笑顔のために戦い続けたいと思います。

愛チカラが世界中の人々が幸せに暮らすことのできるみんなの「家」となれるように…

We are family!!

福島っ子サマーキャンプ

福島っ子サマーキャンプ
Returns

笑顔が生まれる場所へ
～終われない旅～

期間：2011年9月16日～19日

aichikara

笑顔が生まれる場所へ　～ 終われない旅 ～

“また会おうね！”の約束は、

果たさなければなりません。

それよりも、ただ私たちが子どもたちに会いたくなりました。

“イマしかない”その気持ちが、

愛知から、子どもたちの住んでいる故郷、

福島県伊達市霊山町小国地区へ向かわせました。

故郷に暮らす子どもたちの様子と、

私たちの目で見た『特定避難勧奨地点』の現実を、

ここに記録します。

ここは、日本で初めて農協が生まれた里です—
その最も豊かなコミュニティが
この地で崩壊しかけている今
私たちは取り戻したい。
子どもたちの笑顔という
何よりも優しい絆を—

はじめに

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
サマーキャンプ副隊長　高嶋辰宜
名城大学 １年

この度訪れた、伊達市霊山町小国地区は、美しい景色と爽やかな風の吹く大自然に包まれています。サマーキャンプから福島に戻り、再び外で遊ぶことを制限された子どもたちはストレスなく生活できているのだろうか、そんな思いを胸に現地を訪れました。

再会した子どもたちの目は、放射線なんかに負けないぞと言わんばかりの強い光を放っていて、私たちの心配は必要なかったようです。ですが、それと同時にこの子たちの瞳の奥にはまだ3.11の傷が残っているのかもしれないとも思いました。今、子どもたちのために何が必要なのか。十分に考えなければいけません。

連日の報道にもあるように、震災直後に比べボランティアの数は月日が経つにつれて次第に減ってきています。未だに多くの方々が仮設住宅で苦難を強いられているのが偽らざる実態であり、今後特に必要になってくるのは被災された方々の“心のケア”だと考えます。震災で抱えた心の傷は消えることがないかもしれません。ただ、少しでも頑張ろう、頑張ろうと前向きな姿勢で過ごせるようになるのなら、私たちはどんな努力をも惜しみません。持続可能な形で、ボランティア参加者の活動が現地復興の一助となり、その歩みが着実に進むよう祈念いたします。

ご協力いただいた皆様方に、心より感謝を込めて、厚く御礼申し上げます。親御さんをはじめ、伊達市長ならびに市職員、伊達市教育委員会の皆様、協賛していただいた企業・個人の皆様、本当にたくさんの方々の情熱と行動力に感動しました。そして私たち愛チカラに共感してくださった方々に、このような活動報告ができることを誇りに思います。今後もウィンターキャンプなどの活動を企画しています。皆様にはそれぞれの形で復興に向け、これからも協力をしていただければと願っています。

終われない旅のはじまり

バスの中からは、正面玄関に一列に並んだ子どもたちが見えました。前のめりになって、駆け出すのを我慢して、砂ぼこりの立たないアスファルトの上にしっかり立っていました。

私たちがバスから大はしゃぎで降りて行くと、子どもたちは一瞬、親御さんの顔色をうかがいました。

そんなことも関係なく、私たちは子どもたちに近づくと、子どもたちは恐る恐る私たちに近づき、その途端一気に走りだして、それぞれ大好きだったスタッフに向かって飛びついてきました。

できるだけ早く建物の中に入るべきであることは誰もがわかっていました。でも、スタッフがその地に降り立った瞬間にみんなでそろってお迎えをしてくださった、そのおもてなしに、私たちは“当たり前”のことの難しさを実感しました。

「地面に転がったら放射能がついちゃうよ！」子どもたちと夢中でじゃれあうスタッフに向かってある子どもが叫びました。するとすかさず、
「放射能？そんなの放射能の方が嫌がって逃げちゃうよ！！」
とあるスタッフが叫び返しました。その時、一瞬で子どもたちの顔色が変わりました。確実に、子どもたちはそう言ってくれる大人の一言を待っていました。それが自分の身に危険なことだとわかっていても。

次の瞬間、子どもたちの顔には、吹っ切れたような“満開の笑顔”が咲きました。

その目の輝きに、私たちはこの旅の“希望”を見ました。この希望を絶やしてはならない。どうすれば子どもたちの笑顔を取り戻すことができるのか？それを見つける“終われない旅”が始まった瞬間でした。

子どもたちのSOS

大はしゃぎの再会セレモニーを終えて、私たちは当たり前のように部屋の中で遊び始めました。

大好きなお菓子やお茶を、子どもたちがお気に入りのスタッフのひざの上で楽しんでいる姿は、まるで遠く離れた家族との久しぶりの再会のようでした。

そうして時間が過ぎ、あたたかい雰囲気にもみんなが慣れてきた頃、遊んでいた布団にもぐって、誰にも気付かれないように泣いている子どもがいます。

その男の子は、サマーキャンプの時は、恥ずかしがり屋で素直に感情を表に出すタイプではありませんでした。そういう子どもが、人知れず、ただ泣いています。

みんなで過ごす楽しい時間の中、あふれ出すたくさんの笑顔の中に、目を真っ赤にしている子どもが何人もいました。

私たちが見えないところで、子どもたちは様々な心の傷を抱えています。その傷は月日を追うごとに大きくなって、いよいよ心をはみ出してしまうことを、子どもたち自身が無言で、わかってもらえる大人に訴えていました。

子どもには“子どもの世界”があります。私たち大人は、今、この瞬間も、震災を言い訳にして、世間の常識という小さな箱のなかに、子どもたちの“希望”を押し込めてしまってはいないでしょうか？

私たちは、子どもたちが小さな胸に抱いている“希望”について、本気で耳を傾け、心から向き合わなければならないのです。

そうしなければ、子が笑い、親が笑う、本当の意味での“咲顔（えがお）”は生まれません。

遠ざかる、ふるさとの味

遊びの時間が終わると、お父さん方が焼いた浪江焼きそばや、お母さん方が作ってくれた郷土料理の“いかにんじん”など、たくさんの手作りの食事でもてなしていただきました。みんなで食べる、久しぶりの賑やかな食事。その雰囲気に、特別な空気が流れていました。

その中で、私たちを気遣い、声をかけてくれた子どもがいました。
「このニンジンには、放射能ないから安心して食べていいんだよ。」
そう、静かにニッコリと笑って、教えてくれました。
それが、子どもたちが置かれている、“イマ”目の前の現実でした。

3.11、あの日を境に、子どもたちは、おばあちゃんやおじいちゃんと一緒に、一生懸命育てた愛情いっぱいの作物を収穫する喜びを失いました。お腹をいっぱいに満たしてくれる“とびきり新鮮な野菜”も食べることができなくなりました。かわりに、遠く離れた土地の作物を選び、調理をされたものを食べるようになりました。時には、家族の中でも、子どもたちは、お父さんお母さんと違う土地の野菜で作られた料理を食べていました。

子どもたちは、まわりの大人の思いを心にとどめながらも、自分の身に及ぼされる影響は、すべて理解することができません。それだけでなく、20年後の自分のために、イマを我慢するということへの理解が低いために、ストレスを感じてしまいます。

そのストレスも包み込み、イマを生き抜く知恵をあたえ、世代を超えて理解しあう根気は、大人しか持っていません。

子どもたちが“わからない”部分を大人の努力で理解しあうことが、子どもの“明日の笑顔”のために、必要不可欠なのです。

それでも、遊びたい！

サマーキャンプでの川遊びやカヌー体験の場では、子どもたちは五感が刺激され、興奮して大声を出したり、走り回ったりしながら、満開の笑顔を見せてくれました。その後は、友だちやスタッフと以前よりも、積極的にコミュニケーションをとるようになりました。自然の中は、自分たちを解放できる場所なのだということを再確認することができた大切な時でした。

「ふくしまが早くなおって、また虫とかをしらべたいな。」

と、ある子どもが手紙をくれました。あの日以来、子どもたちは、無限の広場であったはずの外遊びの場を失いました。その代わりに、手軽に楽しむことのできる室内の遊びでしか、五感を磨くことができなくなりました。

さまざまな屋内プログラムで、子どもたちの体力、知力、感動力を育てるどんな努力をしても、“風”を感じることはできません。でも、その風を少しでもおこすことに、目の前で必死になっている大人の背中を、子どもたちは一生忘れないでしょう。そうやって、“咲顔～明日への希望”はつながっていくのです。

ただ、子どもの集中力は、本物の好奇心を満たしてくれる場でしか発揮することができません。“外遊びは危険だから我慢して”とどんなに大人がさとしたとしても、子どもには、その大切さを大人と同じように理解するのは難しいことです。

“わかりたくもない”とあえて叫ばない子どもたちが、部屋の中ではしゃぎまわっていました。

そんな子どもたちには、やはり大自然が似合いました。

共に“むすぶ”絆

子どもたちは、サマーキャンプ中、自然の中で自分を解き放つことができました。でも、内心は家族に会えないさびしさをずっと胸に抱えていました。この経験は、自然の中で心を解放させたという一時的なことよりも、子どもたちのこれからの人生にとって大切なことでした。

子どもたちが、見知らぬ土地で、見知らぬ人々に囲まれながら、“孤独”と向き合い生ききったチカラは、子どもたちをより大きくしました。

あの日以来、子どもたちは、何もかもが変わってしまった環境の中で、この世に生きる一人の人間として、自分に与えられた役割を全うし、家族や友だちや私たちとの絆を“むすび”続けています。

それはまぎれもなく、子どもたちの“明日の笑顔を夢見るチカラ”が成し遂げたものでした。

そんな子どもたちが笑顔で示す“明日に向き合うチカラ”に励まされ、親御さんは笑い、その笑顔を見て、さらに子どもたちの笑顔も満開に咲いていきました。家族みんなの笑顔が、“明日への希望”をあきらめずに前に進む第一歩であることを、誰もが強く心に刻みました。

このかけがえのない“気づき”は、悲しみや怒りを抱えながら、子どもたちの笑顔を守るために必死の思いで一歩を踏み出した大人たちにとっても、本当に大切な“生きるための教訓”を取り戻すきっかけとなりました。

『決然と朗らかに生きる』

そのための旅は、震災を乗り越えるためではなく、子どもたちが成長するために、ずっとずっと大切なココロです。

ココロの線量計

　このたび訪れた小国の人々は、ひとりに1つ“ガラスバッジ”と呼ばれる線量計を身に着けています。いつも、どこに行くにも、何をするのにも、放射線量とともに生きています。

　『どうして自分たちだけがこんな辛い思いをしなければならないのか…』

　『すべてを忘れて、どこか誰も知らない土地に行きたい』

　そのどちらにも“決断”をすることができないまま、毎日を過ごしています。

　小さなコミュニケーションに細心の注意をはらわなければ、近所付き合いもできなくなりました。避難の指定をもらえた人と、もらえなかった人とでは、現状に対する考え方も大きく変わってしまいました。

　小さな里が長い間、大切に守ってきた、ココロの調和が、音をたてて崩れさろうとしています。それが、日本で100世帯あまりしか存在しない、特定避難勧奨地点という制度に、一見守られているようにみえる土地に暮らす家族の真実です。

　そんな毎日の中で、ご家族は、子どもたちを愛知県へ疎開させるという大きな“決断”をしました。それも、23日間という長期間。

　『とにかく子どもたちを遠くへ行かせてやりたい』

　そのココロは、ただ一点の曇りもなく、親が子を思う姿そのものでした。顔も見たことがなく、話もしたことがない私たちに、自分の命より大事な子どもたちを預けました。

　そしてこの夏、離ればなれになった家族は、この“決断”によってさまざまなココロを得ることができました。

　ある人は、家族みんなで一緒に暮らすことの意味を知り、ある人は、自分自身の心のゆとりの大切さを知り、ある人は、子どもたちにとっての除染作業や移住の意味を考えました。

　ひとつの“決断”がもたらす現実を、みんなが知ったのです。だから今度こそ、前に向かって生きなければなりません。

　自分自身でつなぎとめた“希望”を絶やさないために…。

“希望”の先には、家族の“咲顔（えがお）”が待っています。

むすびに

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
学生副代表　柴田　結実子
至学館大学 4 年

サマーキャンプが始まった時、子どもたちの表情は、怒っているように見えました。私には、なぜ子どもたちがそんな硬い表情を浮かべているのかわかりませんでした。子どもたちの力になりたいと思い、企画から携わったサマーキャンプでしたが、実際に子どもたちが置かれている状況や、そこで子どもたちが何を感じているかということについて、まだ理解が浅かったのです。

当初、子どもたちは、『やってもらって当たり前』というスタンスでした。玄関で自分たちが脱いだ靴を片付けるのは、スタッフの仕事だと思っていました。そこから、子どもたちとのぶつかりあいが始まりました。愛チカラのキャンプ隊長を中心に、『子どもたちに成長してもらうために、自分たちに何ができるか』について毎日遅くまで話し合いました。子どもたちへの伝え方を工夫して、少しでも子どもたちが自分で考えるようにし、自主性をもって取り組めるような体制を作りました。みんなについていくのがつらそうな子には声をかけ、話を聞いたり、気分転換させたりして、自分から集団に戻りたい、と言うまで寄り添いました。

子どもたちの様子を見ていると、普段の何気ない行動にも放射線の影響を気にしてきたために、ストレスをためているように感じました。私たちは、そんな子どもたちに少しでも自由に遊んでほしくて、遊ぶ時にはなるべく制約をしませんでした。服のまま、川に飛び込んで遊びました。着替えも持たずにグラウンドでバケツで水をかけあい、びしょ濡れになりました。そうやって遊ぶうちに、子どもたちが本来の笑顔を、生き生きとした表情を取り戻していくのがわかりました。

福島に戻る日、久しぶりに子どもに会って、親御さんたちは涙を浮かべていました。子どもたちも泣いていました。「帰りたくない」という子もいました。そのとき、私は、子どもたちがどれほど複雑で、過酷な状況に置かれているか、理解できたように思いました。

私たちは、愛チカラでの活動を通して、常に、自分にできることは何か、自分が生きている意味は何かを考えています。そして、子どもたちの笑顔のために、自分たちも笑顔になるために、仲間とともに毎日全力でぶつかっています。未来の子どもたちの笑顔を守るために、私たちが今できること、それは、今、生きている人全員が、自分で考え、判断し、行動していくことだと思います。

子どもたちも、一歩を踏み出し続ける私たちの背中をみて、大きくなってほしいと思います。

We are family

愛チカラスタッフ

青井　里美（さっとみん）
石原　杏莉（あんり）
岩井　沙織（さおりん）
上里　哲太郎（てっつん）
大井　優子（たま）
大島　巧（おじサンタ）
小原　有輝也（ゆっきーや）
片山　日香里（ぴっかり）
鬼頭　将大（きとぅ）
小金沢　奈央（なお）
小島　琴雅（こっちゃん）
小林　明日香（くろ）
小森　　舞（ハーフィー）
志治　友規（なんなん）
柴田　結実子（はな）
鈴木　理恵（スー様）
鈴木　流風（るってぃ）
高嶋　辰宜（たっつん）
冨田　正美（トミーさん）
野田　実里（のだみ）
長谷川　透（はせがわさん）
林　竜人（りゅうと）
服部　誠司（にんにん）
福井　愛実（あみーご）
松下　昭二（しも）
御堂　大貴（みどぅ）
矢野　江里（エリーゼ）
山本　祐里（ゆりぃ）
横倉　亜美（あみぃ）

50 音順

Thank you

We are family

ボランティアスタッフ

浅野　佑斗	木村　有美子	竹中　仁子	松浦　恵介
市川　栞奈	桑山　数馬	豊吉　佑哉	右高　早人
市川　敬介	小境　あゆみ	中嶋　良輔	水谷　浩平
伊藤　渚沙	坂本　舞	中瀬古　菜月	水野　雄介
岡田　浩実	佐藤　ちひろ	流矢　沙希	溝口　実希
加藤　沙耶	志村　初菜	野村　小百合	宮田　恵理
兼松　祐太	杉浦　眞帆	林　拓也	森　貴祐
河内　涼	鈴木　寛太	東田　麻里	横山　真理奈
川松　真也	高橋　晃子	平林　愛唯	吉田　美貴子
木下　章	竹内　啓祐	星野　隼人	吉松　拓哉
木平　雄大	竹内　来花	増川　真由	米川　茉優

50 音順

Thank you

We are family

協力して下さった方々

樋口　一則
（マイクロバスの運転・貸出）

竹内正美＆小原村のみなさん
（田舎体験）

矢田　ゆかり（洗濯ボランティア）

鈴木さん（洗濯ボランティア）

高坂さん（洗濯ボランティア）

後藤さん（洗濯ボランティア）

友永さん（洗濯ボランティア）

永田さん（洗濯ボランティア）

樋口　菊代（洗濯ボランティア）

井出　輝美（腹話術）

中屋　豊雄（言霊プロジェクト）

二階堂　裕太（DJ）

小向　定（ライブ）

鈴木　東（送迎・科学教室）

たこぼーさん（ジェンベ WS）

長谷川　康二（PA 貸出）

野末　隼（大道芸）

後藤　宏貴（ファイヤーダンス）

山下　保夫（ポン菓子）

Thank you

協力団体、機関

・至学館大学・短期大学部
・至学館大学附属幼稚園
・密蔵院
・名古屋市教育委員会
・名古屋港管理組合
・名古屋市科学館
・名古屋港水族館
・豊田市役所　社会部　旭支部
・刈谷市役所　経済環境部　商工課
・岐阜県教育委員会
・岐阜県インラインスケート協会
・名古屋ビジュアルアーツ
・全日本女子レスリング　栄 和人 ヘッドコーチ
・アテネ・北京オリンピック金メダリスト　吉田 沙保里　選手

協力企業

・ソフトバンクモバイル株式会社
・コカ・コーラセントラルジャパン株式会社
・アサヒカルピスビバレッジ株式会社
・サッポロ飲料株式会社
・株式会社ジャパンビバレッジ
・中部キリンビバレッジサービス株式会社
・サンポッカサービス株式会社
・株式会社アペックス
・エフ・ヴィセントラル株式会社
・あいち知多農業協同組合
・小原商工会
・株式会社喜多八
・株式会社ロハスフード
・株式会社 Office OPA
・株式会社ブランシェ
・長根山ぶどう組合
・Kojika Café
・押し花グループ　ミモザ
・株式会社ガロ・コーポレーション
・有限会社近清商店
・紙文総合販売株式会社

この福島っ子サマーキャンプは、原発の被害によって日常の当たり前の生活が送れなくなってしまった子どもたちに、放射能を気にせず思いっきり遊び、笑顔になってほしいとの想いで、この夏休みに開催した23日間という長期間のキャンプです。
これは、キャンプに関わった学生たちの心や気持ちに火を点けて、未来の日本を素晴らしい国に変えていく原動力にしたいという相乗効果を狙ったもの（共育）でもありました。
学生たちは、世界で一番素晴らしい23日間の生の講義を受講し、結果として、一回りも二回りも大きく成長しました。
この経験は、彼らが、これから生きていく上で必ずや自信に繋がるものになるだろうし、将来の地域の中核を担う大人となった時に地域や社会全体の底上げにも繋がるものだと信じています。

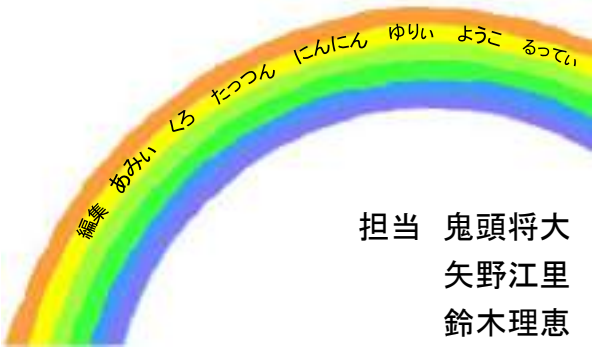
東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
学生コーチ　冨田正美

お問い合わせ

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ

代表　石原杏莉　　副代表　鈴木理恵

〒460-0017　名古屋市中区松原 1-3-5　605 号
ＴＥＬ：052-222-4311
E-mail ： aichikara2011@gmail.com
ＵＲＬ： http://www.ai-chikara.com/
（愛知県防災ボランティアグループ 23 防危第 98-1 号）



担当　鬼頭将大
矢野江里
鈴木理恵